【有償配布 や Web(ホームページ, ブログ, facebook 等)へのアップロード・転載はお止めください】【リンクはご自由にお貼りください】

「結婚の自由をすべての人に」東京第二次訴訟(東京高裁)控訴審第3回期日(20250520)で提出した書面です。

令和6年(ネ)第1861号 「結婚の自由をすべての人に」訴訟控訴事件

控訴人：山縣真矢 外7名

被控訴人：国

控訴人ケイ意見陳述要旨

2025(令和7)年5月22日

東京高等裁判所第24民事部イ係 御中

控訴人 ケイ

1 控訴人のケイと申します。本日は、この場で意見を述べる機会をいただき、ありがとうございます。私は、社会生活の中で、自身のセクシュアリティをカミングアウトしていないクローゼットで、好きになる対象が男性と女性に限らず、相手の性のあり方によらないパンセクシャルです。

インターネットの普及により仲間とつながれるようになるまで、自分の周りには性的マイノリティはいないように見えていました。そのような中、私は「結婚」のプレッシャーを受けて大人になりました。男性と交際しているときには、このまま結婚してしまえば楽なんじゃないかと何度も思いました。しかし、本当に結婚したい、伴侶として共に生きたいと思えた人は、20代半ばに出会い、20年以上を共にした同性パートナーのAだけでした。

ただ、現実には、私は、私と同じように結婚のプレッシャーを受けていたゲイ男性と法律婚をしました。異性と結婚することが「普通」とされた時代、その「普通」とされる周りの期待に応えなければなりませんでした。

【有償配布 や Web(ホームページ, ブログ, facebook 等)へのアップロード・転載はお止めください】【リンクはご自由にお貼りください】

「結婚の自由をすべての人に」東京第二次訴訟(東京高裁)控訴審第3回期日(20250520)で提出した書面です。

私とパートナーのAは、ふたりの関係を詮索されて傷つくことを恐れ、その関係は公にすることはできませんでした。私とAは、社会からの承認がなくとも、ふたりの絆と愛情さえあればいいとお互いに言い聞かせて関係を守ってきました。

2 人生が半分過ぎて、自分たちが生きてきた歴史をこのまま無いものにしたくないとの思いから、勇気を出して、私は、この裁判の原告になりました。しかし、残念ながら、裁判が始まってほどなくして、私たちは別れることになりました。

A(以下「パートナー」といいます。)が家を出ていく最後の夜に、私たちはこんな話をしました。

「もし結婚できていたら、こんな結果にはならなかったかもしれないね」と。

先に帰宅した方がごはんを作って、お互いの帰りを待ち、愛犬のお散歩がてら、駅に迎えにいていた日常を職場や家族に話せていたなら。くだらないことで喧嘩したときに、誰かに愚痴をこぼすことができていたなら。パートナーやパートナーの家族が病気になったとき、辛かったときにそのことを話してサポートを得られるような状況であったなら。

みんなが当たり前前に家族のことを話しているように、日常の些細なエピソードを笑いながら周りに共有できていれば、私たちは二人だけの閉じた関係の中で煮詰まらずに済んだように思います。私たちの関係は、誰かに祝福してもらえることはありませんでしたが、別れのときですら、誰にも頼ることはできませんでした。

喪失感のどん底にあっても、離別の苦しみを誰にも言えず、一歩家を出たら、何事もなかったかのように振る舞うしかありませんでした。

【有償配布 や Web(ホームページ, ブログ, facebook 等)へのアップロード・転載はお止めください】【リンクはご自由にお貼りください】

「結婚の自由をすべての人に」東京第二次訴訟(東京高裁)控訴審第3回期日(20250520)で提出した書面です。

3 後に戸籍謄本を取得したとき、そこに記されていたのは、ほんの短期間だけ形式的に婚姻関係を結んだゲイ男性の名前だけでした。私が20年以上かけて築いたパートナーとの関係の痕跡は、一文字もありませんでした。そのとき私は、半生を共にした彼女の存在が「無いもの」として扱われるだけでなく、私自身の人生さえも、「なかったこと」のような錯覚に陥りました。毎日一緒にいたパートナーとの時間が、社会の中では存在していませんでした。頭では理解しているつもりでいましたが、改めて現実を突きつけられました。

誰にも話さないことで守ったはずの自分自身の人生が、誰かの記憶にも、記録にも残っていないことで、あやふやなものになってしまいました。

人としての尊厳を奪われたように感じました。

4 パートナーとの結婚を願って、この裁判の原告になったものの、今はその相手はいません。それでも、結婚相手がない今も、なぜこの場に立ち、原告・控訴人として声をあげ続けるのか。

同性パートナーとの関係を隠すために、ゲイ男性と形式的な婚姻関係を結んだほどのクローゼットである私が、世間に身ばれするリスクを冒してまでもこの裁判の原告になったのは、単に婚姻制度の不便さを解消したかったからだけではありません。

社会から隠れて生きるクローゼットの存在はないものとなっていて、その声はなかなか社会には届かないからです。そして、社会的に承認されないことが、自身のアイデンティティを揺るがし、確実に自己を蝕んでいくことを、身をもって知っているからです。

アイデンティティは、自分ひとりではつくれません。誰かと生き、社会と関わる中で、「私はここにいていいのだ」と感じられることで、初めて、自分自身の存在を確かにすることができるのだと思います。

【有償配布 や Web(ホームページ, ブログ, facebook 等)へのアップロード・転載はお止めください】【リンクはご自由にお貼りください】

「結婚の自由をすべての人に」東京第二次訴訟(東京高裁)控訴審第3回期日(20250520)で提出した書面です。

だから私は、伝えたいのです。

「制度から排除されている」ことは、「存在をないこととして扱われ続けること」なのだということ。自分が誰かと生きる自由と権利が認められているかどうかは、私たち一人ひとりの尊厳に関わる問題です。

たとえ今、愛する人がいないとしても。

婚姻制度は、特定の誰かがいるかいないかにかかわらず、自らの人生を主体的に選び取る自由のために、選択肢として必要不可欠なものだと思います。誰もが、愛する人と共に生きることを夢見る自由を持ち、その夢を、制度が支える社会であってほしいと願っています。

5 結婚ができないことは、単なる不便さではありません。私たちの存在を、社会が公的に認めないということです。

好きな人と生きる自由を、権利を、奪われることは、私の存在を、国が、社会が、承認していないのと同じです。それは、誰かを愛して生きる人生が、ずっと「なかったこと」にされるということです。

結婚の自由は、すべての人に保障されるべきです。

愛する人と生きることを、誰もが語れる社会に。

自分自身の存在を、誰もが確かに感じられる社会に。

6 私がこの場に立ち、原告・控訴人であり続けるのは、過去の喪失を悔やむためではありません。

自分の人生を、もう「なかったこと」にしないためです。そして、ひとが、人生設計をするときに、また、その人生を語るときに、恐れや後ろめたさを感じなくてすむ社会にしたいからです。

【有償配布 や Web(ホームページ, ブログ, facebook 等)へのアップロード・転載はお止めください】【リンクはご自由にお貼りください】

「結婚の自由をすべての人に」東京第二次訴訟(東京高裁)控訴審第3回期日(20250520)で提出した書面です。

この裁判は、私自身の尊厳を取り戻すための闘いであり、今を生きる人々、そしてこれから生まれる誰かが、恐れずに自分の人生を語れるようにするための闘いでもあります。

どうか、この法廷で、すべての人に結婚の自由が保障されるべきだということを、明確に示してください。

ありがとうございました。